

# 新 ままごと 新聞

MAMAGOTO NEWSPAPER

発行元：ままごと

NOV 30, 2016 NO.18



## 「すべて偶然だった」

柴幸男

小豆島の夏が終わりました。おかげさまで「きもだめスイッチ」も「喫茶ままごと パフォーマンス販売」も良い作品になりました。しかし、この夏、最も印象に残った出来事は、島外の人には誰も知らない滞在最終日に起こりました。

この日、ままごとは坂手に住んでいる一人暮らしのお年寄りのためのサロンで出張公演を行いました。歌、体操、紙しばい、落語演劇など少しずつ稽古した作品を約1時間ほど並べて上演。最後はお客さんと一緒に「故郷」を歌いました。

お年寄りを前に紙しばいを上演している新菜さんを見ながら僕は「ずいぶん遠いところになってしまったなあ……」と愕然としてしまいました。本当なら、東京で芸能人が出るような演劇をつくって、有名になって、お金をもらって、良い目にいたいと思っていたはずなのに。それが今や島の老人と「故郷」です。なぜと思いがながらも、不思議と気分は悪くはありませんでした。

その夜、喫茶ままごとにて『わが星』の小豆島公演に関するドキュメンタリー上映会がありました。上映作品は『わが星』の記録でもあり、小豆島高校の記録にもなっていてとても良かつ

た。この企画は新菜さんと宮永さんが独自に進めていたもので、二人が何をしたかったのかこの夜やっとわかった気がしました。小豆島の夜に、島の人々と映像を観ながらやっぱり「どうしてこんなことになったのだろう」と考えていました。

すべては偶然でした。まったくの偶然が、今の状況をつくりました。

2010年以降、ままごとは運命の場所のようなものを探していました。劇団が未来を過ごすべき場所を探す旅をしていました。しかし残念ながら、そんな場所は見つかりませんでした。探し方か、タイミングか、相性か、理由はわかりません。そして、ままごとが辿り着いたのは、たまたま声をかけられて訪れたこの島でした。

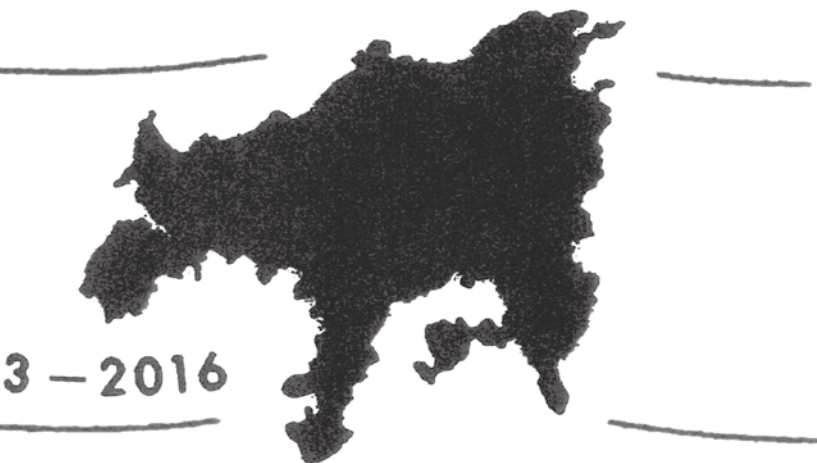
偶然にはすごい力がある。もしかしたら宿命や必然を待つよりも、必死にくらうとするよりも、沢山の偶然を巡りあわせること、そして、その偶然に全力で身を任せてみるの方が大切かもしれない。

いかに運営するか、いかにコンテンツを充実させるか、に必死だったはずなのに、気がつけばもうすでに団体も個人も偶然に身を任せ、楽しんでいる。そしてこれからの偶然を楽しみにしている。いつのまにか人生が大きく変わってしまったのだ。そんなことを実感した、夏の最後の一日だったのでした。

# ほやほやの 思いをこころに

加藤仲葉

去年『わが星』小豆島公演でお世話になった方々が今年の『港の劇場』を楽しみに来てくれたこと。観には来られなかったけれど気にして声をかけてくれた方々がいたこと。また会いたいと思っていた人たちに、ちゃんとまた会えたこと。去年『わが星』を観てくれた方と今年改めて出会って、その時の感想を直接聞けたこと。『小豆島きもだめスイッチ』に島内外含め多くの方が力を貸してくれたこと。『小豆島きもだめスイッチ』に参加してくれた幼稚園児の子が何日もずっと「楽しかったね!」と言ってくれているという話を聞いたこと。その話をしてくれた方が「きもだめしももちろんやけど、夜更かしして、そのあと喫茶ままごとでメロンソーダ飲んだのがまた楽しかったんやろうなあ」と言ってくれたこと。拳げればきりがないほど、胸を打たれることがたくさんありました。いつか、ままごとに関わってくださった方々がどんな思いで、どんなことを実際にしてくれていたのかをまとめることができたらなあ、と思いたてほやほやのことをここに書いておきます。



小豆島から海を臨む (加藤)



喫茶ままごとのテラスから (宮永)

# 「劇場」が 生まれた瞬間

宮永琢生

2016年4月にオープンした「喫茶ままごと」は、夏会期に合流した「ままごと」メンバーのパフォーマンスが行われた時、ようやく『劇場』として作品を生み出せたような気がします。そして日々店内で起る『劇』的な瞬間を目の当たりにしながら、喫茶の窓から見える海はずっとこの島を眺めていたんだな、ということに気付きました。この海は、私たちが知り得ない『劇』的な瞬間を、誰よりも深く、誰よりも静かに『観』ていたのだと思います。

そして、ようやく生み出せたと考えた『劇』も幻のように消え去り、喫茶の入り口に掲げられたコンセプト文を読み返しながら、未だ『劇場』としての答えは出ないまま季節は秋に。あの夏、喫茶の窓から見える海には、我々の『劇場』はどのように映っていたのでしょうか。

「喫茶ままごと」夏会期の活動は、店員として参加してくれた劇評家の落雅季子さんのブログ「人魚はお砂糖しか食べないII」に詳しく記録されています。まるでフィクションのように綴られた私小説的な小豆島滞在記は、「喫茶ままごと」という『劇場』から生まれた大切な作品のひとつとなりました。



## 共演者になれた

大石将弘

小豆島に住む人たちの3年間。最初は、自分がこの町にいることを認めてもらうことからでした。外に出て、挨拶をして、を毎日繰り返し返して、演劇をつくって、やって、生活をして。少しずつ、ままごとを知ってもらえて、演劇を観てもらえるようになって。今年、とうとう共演者になりました。「小豆島きもだめスイッチ」の出演者は、全国の演劇人、会社員、大学生など、演技経験もさまざま。そして小豆島の人たち。町のあちこちの暗闇に潜んで、お客さんが訪れるたびに、3秒〜30秒の小さな演劇を上演しました。光瀬（指絵）さんの演出を受けて日々演技に磨きがかかっていくリハーサルの光景や、終演後汗だくで控室に戻ってくる人たちを見て、勝手にうれしく、頼もしく、感じていました。

怒涛だった20日間の滞在から戻り、一息ついて、今考えるのは。明るく、開いていく演劇のこの先と、そうじゃないものについて。これまで出会った人たちにとって、まだ見ぬ誰かにとって、演劇が果たせる役割について。自分が果たせる役割について。

## — 小豆島での3年 —

3年にわたり、小豆島での活動を続けてきたままごとメンバー。それぞれが感じた小豆島での思い出を綴ります。

201



小豆島には「おせたい」の文化があります（端田）  
撮影：濱田英明



「小豆島きもだめスイッチ」より（大石）

## あの姿を

## 忘れたい

端田新菜

小豆島と東京を行き来するようになって、今年で4年になります。息子も4歳になりました。あつという間すぎる4年間でした。

小豆島で生まれた子どもはみんな18歳で島を出る、というのは島を舞台にした小説にも書かれていて、島にいる間は私はよくそのことを考えています。息子のこと。それから12歳で私を手放して後悔していた母のこと。

「小豆島きもだめスイッチ」で、島に暮らす家族と共に、家族の役をやらせてもらいました。お父さんとお母さんと、息子さん二人と娘さんと、みんなで暑い夜の間に潜んで出番を待ちました。出番が来たらワッと飛び出してまた潜む。繰り返しすること一晩30回ほど。息子たちは疲れると、母の肩に手をかけて、休む。1人が先に母の肩に捕まるともう1人は父の肩に捕まる。2人は双子で、この春に高校を卒業して島を出ました。妹さんは高校三年生で、今年が島で暮らすといった最後の夏です。

きっと私は、彼らがお母さんの肩に手をかける姿を、妹が兄と父親と夜空を眺めて笑いを堪えている姿を、ずっと忘れたいと思います。

# 星野概念 & 青木拓磨も 市民と共に出演 ままごと「交響曲『豊橋』」(合唱付き)

9月22・24・25日に、愛知県豊橋市にて、ままごと「交響曲『豊橋』(合唱付き)」が上演された。柴幸男が構成・演出を手がけ、ミュージシャンの星野概念と青木拓磨が作曲・出演した。

創作にあたり、実際に豊橋の街を歩いた星野と青木。星野は「路面電車が珍しく、面白かったです。それ以上に商店街のスマートポールはとても珍しく、とても面白かった。フィーバーを連発したスマートポールのボールがゴロゴロする音が印象的です。公園でフオークのコンサートをやっていて、そこで聴いたボブディランのカバーに胸を打たれて、思わずこっそり録音しました」と、その鋭い聴覚で、豊橋の街の音をしっかりとキャッチした。青木は「海が近いからか、風がよく吹いていて、まずその音が印象的でした。あと小学生の時に鉄ちゃんだったので、PLAT近辺から見える駅の様子だったり、市電だったり、たまらなかつたです」と街全体の雰囲気



を連発したスマートポールのボールがゴロゴロする音が印象的です。公園でフオークのコンサートをやっていて、そこで聴いたボブディランのカバーに胸を打たれて、思わずこっそり録音しました」と、その鋭い聴覚で、豊橋の街の音をしっかりとキャッチした。青木は「海が近いからか、風がよく吹いていて、まずその音が印象的でした。あと小学生の時に鉄ちゃんだったので、PLAT近辺から見える駅の様子だったり、市電だったり、たまらなかつたです」と街全体の雰囲気



秋風に乘せて奏でられた、交響曲『豊橋』。街の隅々にまで、ちゃんと届いたのだろうか。

にすっかりほだされたよう。2人は、小豆島や象の鼻テラスでの公演でも、ままごとや柴幸男と共同制作を行っている。柴との創作について、星野は「柴さんは物事をすごく構造的に考えてそうなのに、個々の自由度を大きく保つ感じがするのでも面白いです。構造化された集団内において、自分のような適当な人間はノイズになりうると思うのですが、その存在を『まあそんなもんだ』とする姿勢が格好いいなと思います。だからこそ規律で縛らなくても、それぞれの自主性が喚起されるんだろうなあ」と分析する。青木は「柴さんと、関わらずなことですが」と前置きしつつ、「初めて行く土地でやることが多いので、そこでの暮らしがまづ楽しい。今までの自分になかったものが生まれることが多い。その場所についてみたいと何が出来るかわからないのが大変といえたいへん。ルールは、その場所のことを好きになる。あと難しいものをつくらない、って感じでしょうか」と、創作の極意を教えてくれた。

# 2017年8月 「わたしの星」再演 高校生 キャスト&スタッフ募集中

2014年に初演した「わたしの星」を、2017年8月に三鷹市芸術文化センター星のホールにて再演します。

柴幸男の岸田國士戯曲賞受賞作「わが星」の世界観を引き継ぎ、火星への転校と文化祭での発表を巡る高校生たちの1日を描いた本作。高校の演劇部などで上演されることも多い本作が、柴の演出によりよみがえります。

なお、上演に伴って現役高校生のキャスト、スタッフが新たに募集されます。応募条件は2017年4月1日に15〜17歳であること。詳細はままごと公式サイト、および三鷹市芸術文化センター公式サイトにて。



## NEXT

多摩美術大学 演劇舞踊デザイン学科  
上演制作実習

◆柴幸男(作・演出)

【大工】ベーターヴェン 交響曲 第9番  
二短調 作品番号125  
2017年1月14日(土)・15日(日)

□編集後記 今月は、小豆島での3年にわたる活動を振り返る号となりました。それぞれが目にした風景、思い出に残っている風景は少しずつ違って、でもどれも忘れがたい3年間の記憶なのだ。改めて実感する内容となりました。2016年も残す所わずか。次号19号もお楽しみに。(熊井)